ソフィアのダイバーシティ
リレーエッセイ
第7回

多様性と日本社会の将来

ダイバーシティ推進委員会委員／学事局入学センター　ファヴェロ・ソウザ・タイス

日本の少子化問題とそれが経済や社会に与える影響は、ここ数十年にわたって注目されてきた課題です。日本政府は、保育施設を増やしたりワークライフバランス政策を導入したり、「多様性を受け入れる」方法として職場でのジェンダー平等を推進するなど、出生率を改善するためにさまざまなアプローチを試みてきましたが、結果は芳しくなく、少子化に歯止めがかからない状況です。

日本は内部からではなく、外部から人々を受け入れることでこの問題に取り組むべき時期に来ています。世界中の多くの人々にとって、日本は訪れたい、体験したい、そしていつかは自分の「ホーム」と呼びたい場所でもある、と私は思います。日本の言語と文化に憧れて10年以上前にブラジルから来日した私もその一人です。

日本の多様性への取り組みは、社会的および文化的な進歩は見られるものの、在日外国人の日常生活にはまだ多くの高いハードルが残っています。日本は少数民族のコミュニティがいくつか存在するにもかかわらず、いまだに単一民族な社会であることを自負しており、「内」にいる「真の日本人」と、「外」にいる「国際的で、変わった」人々とを強く区分しているように感じます。このような「外」の人々は、たとえ一生を日本で過ごしたとしても、常に部外者とみなされてしまうのです。

ダイバーシティの推進は異文化交流をもたらし、人びとの視野を広げるきっかけになると信じています。しかし、多様性が人々を結びつけることではなく除け者にすることとして利用される場合、それは大きな問題となります。複雑な在留資格の条件や手続きに加えて、社会的かつ文化的な壁は外国人にとって常に懸念材料となっています。例えば、外国人が日本語を使いこなすことは、他の言語を習得するのと同じように自然に扱われるべきなのに、見下されているように驚くほど非常に難しいことだと考えられています。国籍はまた、単純な作業、たとえば、日本人の名前の文字数に制限されている手続フォームなどにフルネームを登録できないことも不利になります。お部屋探しのような必要不可欠なことでさえ、「外国人」と「ペット」が賃貸の「不可」条件に並んで含まれて、それは偏見から生まれる不快な経験を強いられます。さらに悪いことに、国籍、学歴、宗教や人種によってより酷い差別を受ける外国人もいるのが実態です。

私は、上記の状況を改善するべきと考えています。差別があろうとも、外国人の数は増加し続けるでしょう。そして、その状況に適応するために、日本は多様性を受け入れることの本当の意味と向き合わなければなりません。上智大学が、日本における国際教育の先駆者として、国際学生及び教職員を積極的に歓迎し、既に在留する異文化のコミュニティの「居場所」を作るためにより大きな役割を果たすことを願っています。高等教育機関として、単なるリーダーではなく、ロールモデルとなり、他者のために、他者と共に社会を築こうとする人材を育成することは、本学の構成員の使命であると考えています。私は、私の「ホーム」となった日本で、その変革に少しでも協力できればと願っています。

2023年度研究支援員制度利用状況

上智学院では、2012年度より、本学研究者が出産・育児・介護等を理由に研究を断念することなく、ワーク・ライフ・バランスを保ちながらキャリア形成を継続し、公平な競争に参加できるよう本制度を運用しています。本制度を利用する教員が研究支援員のロールモデルやメンターとしての役割りも担っており、研究支援員の育成といった波及効果も出ています。

所属	2023年度		
	男性	女性	合計
総合人間科学部	3	7	9
総合グローバル学部	0	1	1
国際教養学部	2	2	4
理工学部	3	4	6
合計	8	14	22

利用者の声

皆川　友香（国際教養学部国際教養学科准教授）

今年度、中山人間科学振興財団より、これまでの研究成果に対して褒賞をいただきました。研究支援員制度のおかげで、2人の小さい子どもを抱えながら、ここまで研究を続けることができました。改めて御礼申し上げますとともに、本制度が継続され、一人でも多くの教員が研究を続けられることを願っています。

中山人間科学振興財団　第32回 2023（令和5）年度「健康格差のヒューマンサイエンス」受賞
応募テーマ（研究課題）：「男性・女性の健康格差に関する社会学的考察」

編集・発行
学校法人 上智学院ダイバーシティ推進室
〒102-8554　東京都千代田区紀尾井町７－１　Email：deib-co@sophia.ac.jp　URL：http://danjokyodo-sophia.jp

NEWSLETTER
上智学院ダイバーシティ推進室
Office for the Promotion of Diversity, Sophia School Corporation
No.10
MAR 2024

Sophia Diversity Week 2023
ダイバーシティ・ウィーク

ダイバーシティ推進室では、毎年11月25日の「女性に対する暴力撤廃デー」から12月10日の「世界人権デー」（含む「12月3日障害者デー」）までの期間を、ソフィア・ダイバーシティ・ウィークと位置づけ、本学学生・教職員を対象に様々なイベントを行っています。第7回目の開催となった今年度も、学生の関心ごとを中心とした幅広いテーマを取り扱い、学生・教職員がともに考えを深める貴重な機会となりました。

展示企画：データでみる上智大学

また、今回初の企画として、組織のインクルーシブ風土の醸成に向けて、本学の学生・教職員のダイバーシティの現状を可視化し展示を行いました。性別割合はなんとなく肌感でこのぐらいかな？と予想する人は多くいましたが、しっかり数値で把握している人は少ないように思いました。また、出身校所在地については、圧倒的に関東が占めていることはデータからみても明らかでしたが、関東以外の高校出身者の学生から、「同じ学部学科に同じ地域の高校出身者がいなくても、学内には仲間がいると知れたら安心感につながる。他の少ない地域を知ることで寄り添うきっかけにもなる。まずは知ることが大切だと思う」という声もいただいたので公表することにしました。教職員の役職データなどもキャリアになにか関係性があるかを考えるきっかけになればと思い公表しました。多くの方が足を止めて見てくださったので、本データを題材に、それぞれが身を置いている環境から考えてみていただけると嬉しいです。当室としても、これから経年で分析していくことで、本学のダイバーシティ経営の強化に役立ててまいります。

推進室・学生共同企画

12/7　西村宏堂さん、冨永愛さんと語るダイバーシティ

ダイバーシティ・ウィーク2023
学生実行委員会 委員長
山口　優太（外英・2）

本企画はダイバーシティ・ウィークの目玉企画として教職員と学生が協働し準備しました。「ダイバーシティへの入り口」になるようなイベントを目指し、多くの学生から支持されている「ハイヒールを履いたお坊さん」として知られる西村宏堂さんと、世界的モデルで社会貢献にも長年取り組む冨永愛さんをゲストとしてお呼びしました。650名ほどの参加者からは、申し込みの段階でお二人に対してたくさんの質問が届き、関心の高さを実感しました。マイノリティやLGBTQなどという言葉がまだ浸透していない時代からグローバルに活躍されてきたお二人が人種や性的指向などの壁を越え、どのようにありのままの自分の姿を誇れるようになったのかを聞くことができ、多様性を受け入れ合う共生社会について考えるきっかけとなりました。このイベントが多くの方にとってダイバーシティの入り口となり、さらなる学びや行動につながることを願います。

学生企画

11/27 Period一緒に考えよう、これからの社会のために～生理の貧困～（企画：学生実行委員会）

ジェンダー・セクシュアリティ問題に取り組む本学の学生団体GES（Gender Equality for Sophia）から2名のゲストをお迎えし、生理の貧困をテーマにしたイベントを開催。生理による心身への負担、重なる出費、生理の理解が進まないことによる相談のしづらさなどについて紹介しました。またGESからは、生理は性自認が女性でない人にも起こり得る問題であることを踏まえ、「生理＝女性だけの問題」と一括りにすることに対して問いかけ、学内での生理用ナプキンの無料提供システム「OiTr（オイテル）」の設置活動の事例から、生理用品が誰にとってもアクセス可能であることの重要性について話されました。そして、参加者によるグループワークでは、義務教育で子どもたちが生理について深く学ぶことが大切だという意見が多く飛び交い、また自身に生理がなくても生理がある家族・友人のことを考えるきっかけになったようです。

11/27 「じゃあ私も」について考える～同調圧力と共に生きる～（企画：総合人間科学部心理学科）

私たちは心理学科として同調圧力に関するイベントを開催しました。普段、同調圧力という言葉を耳にすることはあまり多くないかもしれませんが、私たちは日常生活の中で無意識のうちに同調圧力をかける側にもかけられる側にもなっています。本イベントでは実際に同調圧力を感じることができる簡単な実験を行い、いかに私たちは多数派の意見に合わせる場面が多いのかということを体験していただきました。また、ゲストとして本学心理学科より樋口匡貴教授をお招きし、同調圧力や多元的無知に関する講義と実験の補足説明をしていただきました。企画を通して、様々な価値観や考え方が溢れる世の中で多様性を認めるために他者を受け入れつつも、必要な場面では自分の意見をきちんと主張することの大切さを学びました。

11/29 ダイバーシティ・ダイアローグ～差別に立ち向かう～（企画：学生実行委員会）

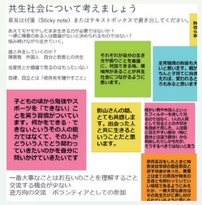
私たちは、「ダイバーシティ・ダイアローグ～差別に立ち向かう～」と題し、8号館ピロティにてワークショップを開催しました。外国人・外国にルーツをもつ人々に対する差別をテーマとし、ブースに立ち寄ってくださった延べ60名の参加者の方々と共に、差別に向き合い、解決策を考えました。ブースでは、匿名事前調査で寄せられた声や、各企画メンバーがそれぞれ関心を寄せるトピックをポスターにまとめ、展示しました。本学の公式キャラクターソフィアンくんも登場するなど終始和やかな雰囲気の中で、学生や教職員が集い、共に課題に向き合う時間となりました。差別について参加者の思考を可視化できただけでなく、これまで気づかないうちに差別をしてしまっていたかもしれない私たちが問題に気づき自分の特権性を自覚するうえで、非常に重要な時間になったと思います。

11/30 私のレンズとあなたのレンズ～体験して考えよう、あなたの「当たり前」は誰かの「困りごと」～（企画：学生実行委員会）

私たちは「障害」とみなされることを「困りごと」と新しく名付けて、日常生活の中の「困りごと」を体験することができる企画を行いました。企画にあたり、私たちは当事者として「障害」のせいで人生を損したわけでもなく、その人の「当たり前」があるだけなのだという想いを共有しました。踏まえて、「障害」という表現への違和感とこの想いを出発点に、その人の「当たり前」がなぜ「障害」とされるのかという当事者の視点を考察する入り口として企画を行いました。視覚・精神・アレルギーの3つについて、ブースを設けて参加者と一緒に考え、「困りごと」の有無に関わらず個人の個性的な「当たり前」なのだという気づきに溢れた時間となりました。

その他企画

12/7 やまゆり園事件が問いかける共生社会のあり方（企画：フューチャーセンター・プロジェクト）



この企画は「多様な他者を理解するための勉強会」として開催してきたものの第4回目の公開勉強会で、脳性麻痺という障害を持つ新井丈晴さんをゲストに招いて、障害者理解と共生社会のあり方について関心のある皆さんとオンラインで情報と意見の交換をしました。第3回に続いて神奈川県立の知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」で起きた大量殺人事件を取り上げて、その事件の背景を理解することから、どうすればこのような事件が起こらない社会をつくることができるのか、理想的な共生社会とはどのようなものなのか、それはどうすれば実現することができるのかをオンライン上で話し合いました。昨年10月にこの事件をテーマにした映画「月」が公開され、その映画で取り上げられた課題についても意見交換をしました。障害者だけでなく、自分とは異なる他者とどのようにかかわっていけばよいのか。今後も、簡単ではないその問いから目をそらさずに、向き合っていきたいです。

12/10 サイエンス。いいね！～理工系に興味のある女子高生のための実験教室～（企画：理工学部）

本学理工学部の3学科に加えて、2021年度から国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の女性研究者支援の補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（調査分析）」を共同で実施してきた同志社大学の文化情報学部からもお越しくださり、理工学部長が中心となって保護者向けの企画と合わせ計5つのバラエティに富んだプログラムを準備しました。当日は女子高生及び保護者の方合わせて約80人が参加し、実際に理工学部で使っている教室やコンピュータールームでの実験は臨場感があり、リアルな体験は大変好評でした。また、保護者向けのプログラムでは、大学院進学やその後のキャリアについて説明があり、本学がこれまで行ってきた女性研究者支援の実績についても紹介し、女性でも安心して学ぶ環境が整備されているとのコメントが多く寄せられました。

そのとき、あなたは、何を着てた？～What Were You Wearing?～（企画：グローバル・コンサーン研究所）

What Were You Wearingは、米国の倫理学者メリー・シマリングが、レイプ被害に遭った自分の体験を書いた「What I was wearing（私が着ていたもの）」という詩をヒントに始まったアート・インスタレーションです。性暴力の被害に遭ったサバイバーに被害時の服装について記述してもらい、そのイメージに近いものを展示します。「挑発的な服装をした若い女性が性暴力被害に遭う」という先入観をなくし、性暴力とその二次被害を防ぎ、「あなたは悪くない」というメッセージを届けることが目的です。本展示は、2014年にアメリカのアーカンソー大学で行われて以来、全米やヨーロッパ、韓国、ベトナムなど世界各地で実施されていますが、日本では今回が初めての開催となりました。性暴力について「あってはならないもの」として蓋をするのではなく、被害者も加害者も身近にいることを前提に、一人ひとりが対策を考えるきっかけとなりました。

紀伊國屋ブックフェア

ウィーク期間中、2号館B1F紀伊國屋書店の入口付近にて関連図書コーナーを設置しました。

LGBTQ+ 支援への新たなスタート地点

教職協働・職員協働イノベーション「性の多様性への理解促進と当事者（LGBTQ+）に対する環境整備の研究」メンバー

2023年に電通グループが日本に暮らす20～59歳の約6万人を対象に行ったスクリーニング調査によると、全回答者のうちLGBTQ+が占める割合は、9.7%であるという。メディアにおいてもLGBTQ+に対する関心が高まっており、日本でも、性の多様性に対する宣言を出したり、性的マイノリティのためのセンターを設置したりする大学が増えてきた。

本学はこうした時代の変化に対応できているだろうか？　この問題に関心を持った教職員が集まり、「教職協働イノベーション研究」の制度のもと、2020年から先行事例の調査や視察、イベントの実施、学内での聞き取り、学院への提案などを積み重ねてきた。メンバーは、LGBTQ+に関連する分野の研究を行っている教員や、当事者、このテーマに関心を持つアライ（当事者を理解・支援する人）の職員など、幅広い。

アライでありたいと思っていたメンバーも、取り組みの過程で多くのことを学び、自身の誤解や無知に気づかされることもあった。学内での聞き取りでは、実は多くの部署で、すでに性的マイノリティへの配慮やサポートが行われていることが分かった。しかし、そうした情報はどこにもまとめられておらず、当事者に届きにくい状況になっていた。

今、上智でできることを、必要としている人に分かりやすく発信したい。この私たちの提案をもとに、2023年には本学ウェブサイトに「性の多様性に対する配慮・対応について」を掲載することができた。

性の多様性に対する理解を促進し、性的指向や性自認にかかわらず安心して過ごせるキャンパスを作るために、すべきことは多い。大きく二つにわけると、ひとつは、マイノリティのための居場所作り、もうひとつはマジョリティへの啓発だ。日本の社会では、身体の性別と心の性別が同じ異性愛者しか存在しないという前提であることが多い。レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、クエスチョニングやこの枠組みに入らない性的マイノリティの人が、この社会で生きるうえで、それぞれどんな悩みや困難があるのか、想像したり、調べたりしたことがある人は、けっして多くないだろう。この現実に気付くことから、まず始めたい。

今後、私たちの取り組みは、教職協働という「有志による研究」ではなく、学院の正式な業務として、ダイバーシティ推進室と協業して進められることになった。これまでの提言が認められ、「研究」ではない、より具体的な実践を行うフェーズに入ったということだろう。

今後の取り組みを通じて、“For Others, With Others”を謳う本学にふさわしいキャンパスをつくることに貢献できればと願っている。

■メンバー一覧　（五十音順）

新井　佳英子	学生局学生センター
石井　由香理	総合人間科学部社会学科 准教授
江口　愛実	学事局グローバル教育推進室 チームリーダー（共同代表）
遠藤　真之介	総務局環境整備グループ（共同代表）
鈴木　茂義	基盤教育センター 非常勤講師／千代田区男女共同参画センター相談員
竹内　修一	神学部神学科 教授
出口　真紀子	外国語学部英語学科 教授
寺平　奏絵	総務局総務グループ
東郷　公徳	外国語学部英語学科 教授
永井　萌子	本学卒業生／お茶の水女子大学大学院生
中村　奈々子	学生局キャリアセンター
福武　慎太郎	総合グローバル学部総合グローバル学科 教授
正山　耕介	人事局付　(株)ソフィアキャンパスサポート 事業部 課長

2023 年度女性研究者グローバル育成奨励賞受賞者

本奨励賞は、2011年度に女性研究者支援モデル育成事業終了後に創設され、理工学研究科の女子学生を対象に、国際的に活躍する女性研究者への第一歩として支援することを目的としています。6月に開催された授賞式では、学長から「今回の受賞を自信と誇りにして、それぞれの道を切り拓いていってほしい。また活躍するその姿を我々教員や後輩たちに伝えてほしい」と激励の言葉があり、受賞学生からは、受賞の喜びと、大学、指導教員への感謝とともに今後の研究についての意気込みが語られました。

受賞者3名

氏名	所属
結縄　ことみ	電気・電子工学領域　博士前期2年（中村研究室）
林　加菜	生物科学領域　博士前期2年（齊藤研究室）
常　慶旻	情報学領域　博士後期3年（荒井研究室）